

## 《他の声》との応答に向けて

— ラテンアメリカにおける《証言》と暴力をめぐる覚書 —

崎 山 政 毅

### 1 「ソレンティナーメの黙示録」から

フリオ・コルタサルは、パリの自宅で中米で写してきたスライドを見ていた。一九七六年のことである。

彼は、著名な詩人かつ「解放の神学」派の神父でもあるエルネスト・カルデナルに迎えられ、ニカラグア湖に浮かぶソレンティナーメ群島のキリスト教基礎共同体への「不法入国」の旅を終えたばかりだった。当時のニカラグアは、三〇年あまりにおよぶソモサー族の独裁に抗する激烈なたたかひの最中にあつた。そのさなかにあつて、ソレンティナーメでは「天国を先取りした絵画」——ニカラグア<sup>プリミティブ</sup>素朴派として現在知られている、まずしい農民たちの《自己価値形成労働》<sup>(1)</sup>の成果が、つぎつぎと生み出されていた<sup>(2)</sup>。

「…サイン入りの作品もサインなしの作品もあつたがすべてがとても美しく、はじめた見た世界<sup>レゾナンス</sup>の姿にもう一度出逢うかのような…」<sup>(3)</sup>。独裁に対する文化的抵抗の結晶にはかならない農民画家の男たち女たちの手による絵画作品に出逢ったコルタサルは、ラテンアメリカの思い出を楽しもうと、ソレンティナーメの絵画のスライドを映しはじめたのである。

だが、そこに「映し出された」のは、将校らしき軍人に額の真中を撃ち抜かれた少年の姿、鉱山労働者の死体の山と去り行く軍服の一团にはじまる「映像」だった。突然に襲いかかってきた残酷な啓示。「ほくは続けた、そのことは覚えている。あらゆる正気さに逆らうそうしたシーンを前に、ほくにできたただひとつのことは、[スライド映写機の] ボタンを押し続けることだった」<sup>(4)</sup>。そして、彼は出逢う。

…ボタンを押し続けているのかいないのか、僕にはもうわからなかった。ジャングルのくっきりした像が映り、屋根を藁でふいてある掘っ立て小屋と樹々が前景におかれていた。

一番手前の幹を背にして瘦せた青年が左側を眺めている。そしてその左側には、一塊の五、六人のもやもやしたグループが彼に銃やピストルをつきつけていた。彼らを見つめている面長の青年の浅黒い額に一筋の毛がおちている。片手を中途半端にあげており、もう一方の手はズボンのポケットに突っ込んでいるのだろうか。ほとんど冷淡なぐらいに、苦境にいることのかげらもみせず、彼らに何ごとか語りかけているかのようだった。その写真はほんやりしていたが、ほくは感じとり、はっきりとわかり、そして見たのだ、その青年がロケ・ダルトンであることを。そして、ほくはボタンを押した。そうすれば、彼をあのような死のいまわしさから救い出せるかのごとく。すると、次に躓われたのは、ブエノス・アイレスかサン・パウロであろう都市のダウントウンの真っ直中で、粉々に飛び散っている一台の車だった。血まみれのいくつもの顔、ちぎれた体のさまざまな部分、ポリビアかグアテマラのある山腹周辺の女たち、子どもたちの生涯。それらの連射のはざまではほくはボタンを押し、押し続けた。とつぜん、スクリーンは銀白色でみだされ、何も映らなくなった。(5)

妻クラウディーヌにスライドをまかせ、気持ちをおちつけにでかけたコルタサルが水をいれたコップを手に部屋に戻ると、彼女はおだやかに笑いながら、こう語る。

きれいなスライドが撮れていたわね。笑っている魚とか、お母さんと二人の子どもたちや野原の小さな牡牛たちの絵。ちょっと待ってね、それに教会で洗礼をしているのもあったわ。誰が描いたのか教えてくれる？サインがなかったみたいだから。<sup>(6)</sup>

彼女が見たものは、ソレンティナーメの絵、コルタサルが写した「そのもの」だったのである。そして、彼は思う。

床にすわって、彼女に視線を向けないうまま、ほくは自分のコップを探して一息に飲んだ。何も言わないつもりだった。今ここでいったい何が言えるというのだ。しかしほくはほんやりと、ひとつばかけた質問を試みようかと思った。どこかで馬に乗ったナポレオンを見なかったかい、という。もちろん、聞きはしなかったけれど。<sup>(7)</sup>

もちろん、この「啓示」を、幻想と現実とのはざまを揺れる作品でしられる、この作家のレトリカルな表現として説明することも可能だろう。だが、彼が写し取ったソレンティナーメの絵画もまたほかならぬ暴力のさなかから生まれたものであり、「映し出された」暴力がけっして幻影などではなく現実に何度となく生じたものであったことを考えるとき、作家のイマジネールに何もかもを還元する「説明」の構図は、すぐさま暴力という現実の容易い忘却へとつながってしまう。

さらに、彼が出逢ってしまったロケ・ダルトンという固有名をもった青年の死が、そこにまとわりついている。

「今ここでいったい何が言えるというのだ」。このつぶやきは、クラウディーヌは見ることなく彼が見てしまった黙示録的な像と、彼が見ることなくクラウディーヌが見た像との亀裂になげかけられたものでありつつ、同時に、ロケを一個の焦点として思いがけなくも開かれてしまった暴力の記憶にかんする《証言》でもある。

ロケ・ダルトン：単独の、そして重ね書きされた「粛清」

コルタサルに襲いかかったロケ・ダルトンの死というイマジネールは、おそらく、暴力と《証言》という問題設定を、暴力の文脈を露にしながらか提起するものである。なぜならば、ロケ・ダルトンはまさしく歴史の《証言》に深く携わることで、いまわしい死を迎えねばならなかった表現者であったからにほかならない。

コルタサルがニカラグアを「訪問」した当時、中米エル・サルバドルにおける反体制武装闘争は、二つの勢力として組織されていた。そのうちのひとつ、「貧民解放軍」の中心的な活動家の一人が、すぐれた作家・詩人としても知られたロケ・ダルトンだった。

ロケ・ダルトンは、一九三五年、エル・サルバドルの首都サン・サルバドルに中産階級の子弟として生まれた。幼少時からエリート教育をうけ、これ以上ない優等生だった彼は、エル・サルバドルの学生としては格段に恵まれた機会を得て、チリの大学に留学することになる。そこでメキシコの画家で共産主義者としても知られたディエゴ・リベラに出逢い、「一八歳にもなってマルクスも読んでいないのか、馬鹿者！」と面罵されたことがきっかけとなってマルクス主義者になった、とロケは彼の死の直後に出版された自伝風の散文・詩の集成『哀れな詩人だった、ぼく…』のなかで回想している<sup>(8)</sup>。

一九五七年に彼はエル・サルバドル共産党に入党するが、当時短期的に権力をにぎったレムス政権によって逮捕・投獄され、死刑宣告を受けることとなった。死刑執行のわずか四日前にレムス政権がクー・デターで崩壊したため辛くも国外に逃れ、メキシコを経て六二年にキューバにわたる。言うまでもなく当時のキューバはフィデル・カストロとエルネスト・ゲバラの指揮の下、社会主義建設へと突き進んでいたが、同時に、いわゆる「キューバ危機」に至る、第三世界を代理戦争の場として固定していく冷戦構造の先鋭化の時期でもあった。

ロケはこのキューバ滞在時に、武装闘争への確信を深め、六四年にエル・サルバド

ルに戻るが、またも逮捕・投獄される。どうにか脱獄に成功した彼は、それ以降の十年間、チェコスロヴァキアとキューバを中心に亡命生活を送った。

そしてプラハ滞在中に、一九三二年の数万人にもおよぶ労働者・農民の大虐殺の生存者である伝説的なサルバドル人共産主義者ミゲル・マルモルに出逢う。プラハで三週間にわたってマルモルと語りあいその貴重な証言を聞き取った経験は、七二年に『ミゲル・マルモル — エル・サルバドル一九三二年の出来事』として世に問われることとなる。

また、詩人としては、六九年に出版した詩集でカサ・デ・ラス・アメリカス賞を受賞し、『ミゲル・マルモル』上梓と同じ年に中米詩人賞を獲得するなど、鋭い状況批判とシニシズムに堕さないアイロニーやユーモアを湛えたすぐれた詩作で国際的に知られるに至る。

彼がつねに念頭においていたのは、社会闘争あるいは革命過程における知識人の役割という課題であった。それはキューバにとどまらず、革命の熱気にみちていた当時のラテンアメリカ全域において、鋭く問われた問題でもあっただろう。自らが属する社会—それが資本制のそれであろうと社会主義を標榜しようとする—のよき批判者であろうとすること。革命の破壊に道を開くようなものではない、変革あるいは革命を生かすような批判という留保をつけながらも、ロケが一貫して主張し実践しようとしたのは、そうした困難な課題だったといえる。

七四年にロケはエル・サルバドルへひそかに帰還をはたすが、彼にはもはや時間は残されていない。七五年五月、武装蜂起への突入時期をいつにするかをめぐる組織内分派抗争の過程で、慎重論を唱えたことを「プチブル」的とみなされ、長年国外にいたことも手伝ってか、最後には「CIAの手先」なるレッテルを貼られて銃殺に処せられることとなった<sup>19)</sup>。

コルタサルが「見た」ロケの姿は、まさしく彼の生きた軌跡の終端に起こった、おぞましい「粛清」のシーンだったのである。

ロケのこの「粛清」は言うまでもなく単独の出来事だ。しかしこの出来事には、同時に、いくつもの「粛清」が重ね書きされている。たとえば、一九八三年四月、「貧民解放軍」など四組織が合同して八〇年に結成した「ファラブンド・マルティ民族解放戦線」の一構成組織である「ファラブンド・マルティ人民解放勢力」の内部で起こった、アナ・マリア司令官（メリダ・アナヤ・モンテス）の暗殺と、その真相究明の過程で起こった「犯人」の自殺である。

「ファラブンド・マルティ人民解放勢力」の公式声明では、「犯人」は最高司令官

であったマルシアル（サルバドル・カエタノ・カルピオ）がイデオロギー的・政治的墮落の末に個人的な権力維持のためアナ・マリア司令官を殺した、とされている<sup>(10)</sup>。だが公式声明とは別に、真相は、今も尚多くの闇の部分を残したまま、明らかにされてはいない。「犯人」とされたカルピオ自身の自己弁護を含んだ発言としては、「人民の団結は最強の武器」<sup>(11)</sup> および「同志よ聞いてくれ！」<sup>(12)</sup>、さらに、カルピオが自殺直前に遺した覚書<sup>(13)</sup>などが存在する。

これらのドキュメントのいずれもが、しばしばあまりに明示的に批判可能なもののように設定される領域のなかに位置づけられてきた、暴力と《証言》の問題を、その闇部から逆照射し再考を要請するものとしてわれわれの前に存在しているのである。

ロケ・ダルトン—ミゲル・マルモル／ミゲル・マルモル—ロケ・ダルトン

ロケ・ダルトンの「爾清」の遠因にもなった、証言集『ミゲル・マルモル』にうつろう。

一九三二年蜂起の失敗につづいた血の虐殺を生き延び、グアテマラ、メキシコ、キューバ、さらには東欧でもその名を知られる「伝説的な」同胞と出逢い、その経験を聞き取って一冊の《証言》にまとめたことを、ロケは次のように述べている。「ミゲル・マルモル同志の生き生きとした証言を聞き取る機会を得たことを、ほくは、多くの人生のうちで非常に満足（＝成功）したもののひとつとしてずっと考え続けていくだろう」<sup>(14)</sup>。

ロケ・ダルトンとミゲル・マルモルとの間には、強い共通項が存在していた。彼らはふたりとも革命闘争における「知識人」の役割を考え続けていた。この場合の「知識人」とは、（高等）教育を受けたかどうかということに矮小化されるものではない。ともすれば容易に固定化され露骨な人格依存の権力関係へと墮する、民衆のたたかいにおける「指導—被指導」を含む問いにほかならない。そして、ロケたちにとって、この問いは、一九三二年の虐殺を決定的な契機とする「公的歴史」による歴史の篡奪という重大な課題をかかえるものだった。

通称「十一家族」といわれるわずかな白人ブルジョアジーに使噓される軍事独裁によって、あたかも抵抗も反乱も変革へのたたかいもないかのように描かれる、直線かつ平坦に持続する暴力の支配に貫かれた「エル・サルバドル国民の歴史」。ロケ・ダルトンとミゲル・マルモルは、不在化されてしまった一九三二年の（失敗に終わった）蜂起と虐殺の記憶をふたたびその「歴史」に差し挟もうとしたのである。

それは、可能的なものの持続的系列に塗り込められてしまった歴史を転倒させる、

「単独性の不-可能な行為としての出来事に支えを求めることによって、可能的なもののカテゴリーを経由せずに真理を時間へと結びつける思考」<sup>15)</sup>の試みであった。換言すれば、不在化された蜂起と虐殺によって平坦に縫い合わされてしまった「前史」と「後史」とを位置づけ直す記憶の作業にはかならなかったのである。

彼らの「単独性の不-可能な行為としての出来事」をめぐって記憶を構成するこの作業は、ヴァルター・ベンヤミンの言う「歴史を渦巻かせる」《根源》と深く共鳴しあう。ベンヤミンの《根源》とは、完全に歴史のカテゴリーであるが、直線的な（すなわち可能的なもののみが「起こったとおり」に時系列化された）歴史の「発端」ではけっしてない。「ドイツ哀悼劇の根源」（一九二八年）の冒頭部、「認識批判的序論」で彼は次のように述べている。

根源は、生成の流れのなかに渦巻きとして存在し、生まれでるものの素材を自身の律動のなかへ捲きこんでいる。事実的なものだけがいくら見やすく並べられていても、根源的なものは認識されはしない。根源的なものの律動を見てとるには、二重の洞察によらねばならぬ。その律動は、一方では復活、再生として、他方ではまさにそのなかにおける未完成のもの、未完結のものとして、認識されることをもとめている。あらゆる根源的事象において確実に認められるのは、ひとつの理念が歴史的世界とくりかえし対決するときの、そのつどの形状にはかならないのであって、理念がその歴史の総体のなかで完成するのは、まだ先のことなのである。したがって、根源は、事実を眺めるところから浮かびあがってくるようなものではない。根源は、事実と見えるものの前史と後史にかかわっている。<sup>16)</sup>

まさしく「事実と見えるもの」の前史と後史にかかわる、共通の関心からの《根源》へむかう協働の一方で、ロケ・ダルトンとミゲル・マルモルとの決定的な懸隔も存在していた。

ロケは、証言を聞き取り集成していくうえで、彼が自らに課した問題意識をこう述べる。

しかし、たんにほくの深い満足を示すためであったり、ほくが個人的にこの記録の集成に与えた重要性を指摘するためにマルモル同志の証言を分析することは、やりがいのあるものとは言えないだろう。逆に、この書でのほくの課題は、根本的に以下のことどもによって規定されている。

第一に、エル・サルバドルの革命の歴史、エル・サルバドル共産党の歴史、ほくたちの国で一九三二年におこった出来事の詳しいあれこれ（共産党が指導した蜂起の失敗について、マキシミリアーノ・エルナンデス・マルティネス将軍の軍事寡頭制で帝国主義べったりの

政府によって—マルティネスはエル・サルバドルの経済的・社会的・民族的構造が北アメリカ帝国主義へ決定的に合併されたという意味での、真の〔帝国主義の〕道具である—三万人のサルバドル労働者が虐殺された出来事である。虐殺は、繰り返すが、約二、三日のうちにおこなわれたのだ、そして何よりも、そうした過程がエル・サルバドル・中米・ラテンアメリカがかかえる今日の現実とむすびあう関係が、世界的な革命運動にはいまだに知られないままに、極端に複雑な現象としてあること。

第二に、〔マルモルの〕個人的証言がもつ政治的・歴史的・人間的（人類学的と云うことさえできるだろう）な尋常ではない質とは関係なく、いかなる軽蔑的な含意も含まない意味での、偏った話のままだという事実。<sup>(17)</sup>

ロケがここで念頭においているのは、サルバドル人ではない。エル・サルバドルの「外側」世界に生きる「読者」である<sup>(18)</sup>。マルモルの証言がハバナとプラハとの間で集められ編集された事実は、当時のエル・サルバドルの政治体制が第一にサルバドル人の読者にあてて、この証言が世に出されることを浮き彫りにするものでもあった<sup>(19)</sup>。

それゆえ、ロケは、「読者」に対して、次のふたつの操作をおこなう。

(1) 証言者個人を間違えようのない歴史的・文化的・政治的領域のなかに位置づけ、そうすることで、今日の革命運動にとって可能な限り、さまざまなタイプの理由によって彼〔マルモル〕の証言にあらわれていないそれらの補足的な情報を提供する。

(2) さらに、テキストその他の聞き取り者かつ編集者（そしてときには分析者）というほくの作業の基準を定める文学的、政治的、そして歴史記述上での目的の一貫性を保持できるように、証言を集成するに際して採用された作業の形式および方法（インタヴューのテクニック、テキストの文学的操作、テキスト聞き取りの時点と証言の出版が準備されていたと思われる時点との間に生じた政治的困難、残された歴史資料の事実描写にまつわる限界に影響を及んだこと、などなど）の一貫性に留意した。<sup>(20)</sup>

ロケ・ダルトンとミゲル・マルモルとの懸隔は、革命に関するその世代的差異、すなわちスターリニズム批判を経たゲバラ＝カストロ以降のラテンアメリカという文脈に属する若い革命家と、コミンテルンとスターリニズムへの信頼をうしなわずに生きてきた老闘士とのちがいが<sup>(21)</sup>にとどまらない。

現前する具体的な身体をともなう同胞の聞き手 — 異国で思いがけなく出逢ったサルバドル人革命家というだけでなく、男性同士の「共犯」性もそこには影響をおよぼしているだろう — に対する、齟齬をはらみながらも共通であることが圧倒的に優位

をしめる意識されない歴史的・文化的・政治的文脈を背景とする、内輪めいた質を多分にもつだろう「親密」な、語られた歴史＝物語の証言が一方にある。そして他方に、世界の革命運動という不確定な希望への賭けにささえられて設定された「読者」に対して、文脈化・歴史化された《証言》が存在する。

語り手―聞き手の非対称な関係に、自らを背景に退かせ操作された「語り手」を突出させることで、「第三者」の「聞き手」へと《証言》を翻訳する二重に非対称な関係が重なるのである。

おそらく、ここで《証言》をめぐる重大な問いが浮かびあがることだろう。

それは、《証言》の「著者」とは誰か、というかたちに集約できる。

### 《証言》の位相

ここで、何人かの論者による《証言》の定義あるいは定義づけへの批判を概観しておこう。

たとえば、ジョン・ビヴァリーは、《証言》をつぎのように定式化している。

わたしが証言 testimonio という語に込める意味は、本あるいはパンフレットの（すなわち、話を聴くことの対極としての印刷物という）形における小説あるいは短編小説の長さをもった語りである。それは彼あるいは彼女が詳述する出来事のじっさいの登場人物あるいは目撃者でもあるような語り手によって第一人称で語られるものであり、彼あるいは彼女の語りのまとまりが通常「人生」もしくは重要な人生経験となっているものである。証言は、あるものは伝統的に文学と考えられ、その他のものは文学ではないとされてきた以下のカテゴリーを含みうるが、それらのカテゴリーのもとに包摂されるものではない。すなわち、自伝、自伝的小説、オーラル・ヒストリー、回顧録、告白、日記、インタビュー、現認報告、ライフ・ヒストリー、《証言―小説 novela-testimonio》、ノンフィクション小説、あるいは「事実描写にもとづく文学 factographic literature」。わたしはとりわけ、証言、ライフ・ヒストリー、自伝、そして「ドキュメンタリー・フィクション」という何でも包含してしまう語でしめされるもの間の区別を取り扱っていくつもりである。だが、証言は本来、ある規範的な文学制度による規制に未だ従属していない、変幻自在でふつうの話し言葉の形式であるため、それに一般的定義を与えるための明確化のいかなる企ても、…最善の場合で暫定的なもの、最悪の場合抑圧的なものと考えられねばならない。（中略）証言における語りの状況は、コミュニケートを必要とする緊急性、抑圧の問題、貧困、サバルタン性、投獄、生存のための闘争、などなどを必然的にともなうのである。<sup>121</sup>

これに対して、ジョージ・ユディセは次のように言う。



…証言のエクリチュールは、<sup>キーセンテック</sup>「真」正の語りとして定義されよう。それは状況の緊急性（すなわち、戦争、弾圧、革命など）によって語るように追い込まれた証人によって話されたものである。民衆的で口伝えでの言説であることを強調しつつ、証人は集団的記憶と集団的アイデンティティの（代表者としてではなく）行為当事者として、彼あるいは彼女自身の経験を描写する。真実は、搾取と弾圧の現状を糾弾する作業の根拠において、あるいは公認の歴史を追放し糺す作業において、召還されるのである。<sup>(23)</sup>

これらの相対的に明確な「定義」に対して、エルツピエタ・スクロドフスカは、「これまで受けとめてきたあらゆる批判的注目にもかかわらず、証言は定義されないままに残されている」<sup>(24)</sup>とし、ビヴァリーおよびユディセを批判する。

どちらの定義においても、証言のエクリチュールは政治的原則に基づいた、強固に行動優先型のものとなっており、その言説の骨組み<sup>アークチテ</sup>を探る作業の価値を減じている。厳密な公式用語においては、証言とは、たんに、生活（人生）の記録、自伝、あるいは告白が法廷で用いられる際のパターンの奇異な一銘柄として思われており、それが小説の形式をとっているにすぎない。このことはすべて、証言のテクニックがじっさいどのようにはたらくのかを明らかにするにいくらかは役立つが、十分ではない。証言のエクリチュールとその認識を支配する付随規約へとさらにわたしたちが探求をすすめるのを助けるために、わたしは、経験の非決定性と言説の閉鎖性の間、生き／生き延び／目撃する行為と、証言し／書き残す行為との狭間にある込み入った緊張に焦点をしっかりとりたいと思う。<sup>(25)</sup>

スクロドフスカの批判は、言説—運動あるいは言説—経験（現実）という二項関係に束縛されるかぎり、正鵠を射ている。しばしば、《証言》が編成されるにあたって、言説の閉鎖性が《証言》におよぼす中立化や因果の調整といった作用は、《証言》の歴史的物質性である暴力の出来事をもつ歴史の断裂の力を損ない、その出来事を生き抜いた経験そのものが一個の歴史（サバルタンの歴史）としてけっして過去に登録されたものではないという意味で非決定的な質をもつことを不可視化してしまうものだからだ。

しかし、ビヴァリーとユディセの主張の核心は、欠落させている点をかかえているにせよ、スクロドフスカの批判によって消し去られるものではない。

上述したようにスクロドフスカの力点は、言説と運動あるいは現実経験を対立する項へと追いやる操作にもとづいている。言い換えると、言説と出来事とを決定的に切り離しているのである。だが、ここで彼女が（そしてわれわれが）問題にしているの

は、言説一般ではない。問題なのはあくまで《証言》なのだ。

わたしが言いたいのは、《証言》の種差性ということではない。言説というかたちで貨幣となる権力（デリダの音声中心主義的権力）をもちろん軽視したり無視したりはできないが、《証言》をめぐる問題は、その貨幣（＝物象関係）が生み出す効果としての無限循環に閉じこめてはならないのである。《証言》を、単独でありながら複数の力が交錯するいま・ここと呼応する存在者たちの歴史として、単一である普遍史に抗する《他の歴史》として、開くことこそが課題ではないのか。

《証言》を言説という設定から解放するのは、限定された時期区分においては「物語」の形式をとらなくてはならないにせよ現在へと折り展かれるかぎりにおいて非決定的なものとして物語の機制そのものを内破させる、時間倒錯的な出来事を証言者が生きているということだろう。

たとえば、クロード・ランズマンが監督したドキュメンタリー映画『ショアー』において、シモン・スレブニクが出てくるシーンを思い起こしてみよう。

ヘウムノ収容所に収容されていた当時十三歳の少年の彼は、歌のうまさによってSSに「愛され」、殺害の期日を延々のばされていた。ナチがヘウムノから撤退するその日、彼もまた頭部に銃弾を撃ち込まれるが、どうにか生き残る。そして、ヘウムノでおこなわれたホロコーストを生き延びた、わずかふたりの生存者の一人となったのである。

彼がランズマンとともにかつてのヘウムノに戻ったとき、収容所はあとかたもなかった。だが、彼は「思い出す」－「ええ、ここがまさにあの場所です」<sup>(26)</sup>。そして、ヘウムノでの虐殺を傍観していた周辺のポーランド人たち－彼らもかつて彼らを歌で感動させたスレブニクを「思い出す」のだが－に囲まれる。それらのポーランド人たちが「なぜユダヤ人が殺されたのか」という「理由」をキリスト教におけるユダヤ人の「罪」から饒舌にかたりだすとき－「それは神の御意志だった。それがすべてです。……それがすべてなのです。そういうことです！」<sup>(27)</sup>－、彼は微笑みを顔に貼り付かせたまま沈黙においやられるのである。

シヨシャナ・フェルマンは言う。「しかし、ポーランド人の村人たちは、今度は彼ら自身がまさしくそうした【ユダヤ人によるキリストの磔刑のような－崎山】儀礼殺人の物語を演じてしまっている、ということに気づかない。スレブニクを抹殺することによって、彼らがまったく好き勝手にあつかい、【そこにいないかのよう】に忘却している証人をいま一度殺すことによって、現に彼ら自身がほかならぬキリストの磔刑とホロコーストの両方を演じてしまっている、ということに彼らは気づかないの

だ」<sup>(28)</sup>。

このとき、スレブニクは、現在においてふたたび「過去」を生きている、いや生きさせられているのである。そのとき・その場にいる証言者に襲いかかってくる「あのとき・あの場」での出来事。彼（ら）や彼女（ら）は、その意味で出来事の暴力のさなかで時間倒錯を生き、生きかえすのだ。

資本が支配する出版・流通という過程をかりに措いたとしても、この証言者—具体的な「証言者」としての単一な属性からつねに逸した存在者—の生きる（生きさせられる）かたちにおいて、《証言》の問題は、言説へと回収されてはならないことである。

言説という問題設定を必要とするのは、証言者から完全に切断された（あるいはそれを意志的・無意志的に選んだ）「分析者」の無責任な（応答不可能な）位置にはかならない。《証言》は言説、より詳しく言えば表象の政治から、つねにすでに「外部」あるいは「不在の残余」としてこぼれ落ちる暴力の問題のなかで考えられなければならないのだ。

ふたたび、ビヴァリーとユディセの欠落という点にもどろう。

彼らの欠落とわたしが呼んだものは次のようにまとめられる。

第一に、《証言》を「現実」の暴力的状況と運動に還元する傾向。

第二に、彼らの言うところの運動（あるいは弾圧にせよ革命にせよ）が、目的論的に近代的組織性をおおかれすくなかれもつ革命運動の抽象的一般性に回収されてしまう傾向に無頓着であり、多様かつ重層的に展開されうる単独なサバルタンの「運動」を語りながらもサバルタンを消尽する危険をもっていること<sup>(29)</sup>。

第三に、その際、「運動」が実体論的な姿をとるために、《証言》自体を開いていく歴史的な非決定性を隠蔽し、出来事に関する問題設定を完全に欠いていること。

彼らの論点から救出すべきは、言説＝表象という問題設定の罟から逃れているという点にこそある。では、上にまとめた欠落をふまえて、《証言》を開く作業はいかなる質のものとして考えられるのか。この問いは、《証言》を近代的な統合された主体（＝主権を保つ著者）のものとして考えるのではなく、証言者のかたちをとった存在者をつうじて語られる、他のなにものにも交換不可能な「出来事の言語」として考えることを要請しはしないだろうか。

証言者が証言をするとき、それは証言者の意志によるようでありながら、彼女や彼が意志ではどうしようもない出来事におそわれ、支配され、「出来事の言語」を語るのである。あたかも資本制社会における商品所有者が、自らの意識においては意志行

為として商品交換をなしていながら、商品という物象（社会を構成する原理的な権力を有する、関係としてのモノ）にその意志行為を支配され、商品語を語る<sup>30)</sup>、という人格の物象化／物象の人格化と位相同型の様態がそこに現出する。

つまりは、出来事は暴力のかたちをなす物象（＝関係）である、ということにほかならない。出来事は単独であると同時に集会的・社会的であり（ある国の通貨のように）、それゆえ、歴史の応答において、廃絶－暴力に継起的に抵抗することをつづじて、暴力ではない可能性をつねに生み出していく力能と場とを交渉しつつ構成していくことが可能な、まったく新たな関係への移行をもとめる不断の試み－が不可避に求められるのである。この廃絶の試みは、まさしく出来事の前身と後身に《根源》としての出来事を縫合する力として呼び込み、「歴史を渦巻かせる」応答の作業であろう。

この課題は、否応なく応答してしまった聞き手＝編纂者にとっては、共通の質もちながら、歴史の応答という点で困難を増す。証言者にとっての出来事に、その出来事にいつ襲われるかという在り方を生きる証言者に出逢うという別の出来事が結合するからである。読者においては、さらに、編成された証言に出逢うという出来事が重ね書きされる。

こうした出来事（それ自体が社会的諸関係が生産した歴史の特異点としての単独な関係であることを想起されたい）の複合的なアンサンブルをときほぐし、折り展げる作業が、目的論的かつ実体論的に設定される「事実としての真実 factual truth」というフェティッシュを解体する。言うならば、作業過程それ自体が構成する経験の凝集が、「事実としての真実」をわれわれのものと生き延びさせ歴史にしていけるのである。

#### 他の声との応答へ

今まで述べてきたことを、抽象的な一般性へと追いやらないためにも、また、アクチュアルな通底項をもった現在の問題として《証言》と暴力を考えるために、この小論の最後に『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』をとりあげてみたい。

『ミゲル・マルモル』は、いくつかの点で毀誉褒貶の対象からまえてもって排除されていたといえる。その理由としては、第一に、男性の証言者－男性の聞き手＝編成者というかたちをとっていたこと、第二に、プラハとハバナという場の物神性によって端からイデオロギー的バイアスをかけられていたこと、第三に、出版・流通がエル・サルバドルという「空白地帯」を軸にたてられ、世界の革命運動に利するという目的がともなっていたため、帝国主義国家に生きる人びとから疎遠であったこと、などが

挙げられよう。

しかし、『リゴベルタ・メンチュウ』の場合は、まったくちがった。

米国で出版された英語訳に対しては、ある共通の観点に基づく批判が寄せられた。ここでは、ロバート・カーのもの<sup>31)</sup>と、「文化的偽善」というどぎつい非難を浴びせかけたディネシュ・ドゥソウサのもの<sup>32)</sup>に簡単に触れておくにとどめる。

この双方とも、論点は表象／代理にかかわっており、リゴベルタ・メンチュウが超越的なシニフィエなどではなく、それゆえ「すべての」インディヘナの人びとを代表して表象することなどできない、という前提から出発する。だが彼らの結論はこのまったく同じ前提に立ちながらも、対極的なものとなっている。

カーの結論はリゴベルタをインディヘナの女たち・男たちのなかに位置づけ返そうとする。そのために、第一世界の中に第三世界の声を閉じ込め、言説としてのみ消費するアメリカ合州国のアカデミズムを彼は批判する。そして「第一世界の白人ブルジョア女性」エリザベス・ブルゴスの編成の下からリゴベルタを引きはなそうと試みる。それに対して、ドゥソウサの結論は、リゴベルタを他のインディヘナからはじき出すことで特殊化し、彼女が米国やグアテマラの政府の状況を極端化しているとしたうえで、「マイノリティの不可侵な特権」を悪用して反米的な雑言を吐きちらす「文化的偽善」の権化として描くのである<sup>33)</sup>。

カーの論点に対しては、これまで述べてきた批判がそのままにあてはまるので、ここではこれ以上触れない。問題はドゥソウサの方だとわたしは考える。

その理由は、第一に、ドゥソウサが非常に鮮明な形でその政治性を提出しているだけに、ともすれば「批判」も同じ土俵のやりとりとなってしまう点にある。検察・警察的な視座から《証言》を無化し抹殺しようとする「論理」に、まっこうからの「直対応」で応えることは、歴史・出来事・《証言》の重大な課題を脇に置いてしまうことにひとしい<sup>34)</sup>。

第二に、そこにはサバルタンが「語る」という出来事への、けっして明示的にはならないための隠蔽をほどこされた非常に強力な防衛規制が発動されていることだ。エリザベス・ブルゴス＝ドブレがまとめたリゴベルタの《証言》には、帝国主義・植民地主義と軍国主義の問題だけでなく、疑いようもなく、ジェンダーとエスニシティあるいは「人種」の問題が組み込まれている。リゴベルタが「すべての」インディヘナを代表しえないというとき、それは一方でわれわれが一人ひとり共約不可能な単独な存在であるということへとしばしば考えがいつてしまう。だが、そこには大きな陥穽がまってもいよう。言説という点からすれば近代的な「個人」としてしか《証言》の

証言者になりえないという機制への批判がなにゆえ抜け落ちて、表象／代理の問題「一般」へと行き着いてしまうのか？また、歴史的な権力のアンサンブルがもたらしたサバルタンの「集合性」の問題は問わずにすまることができるのか？男の言葉は普通としての固有名のもとにつなぎとめ、女の言葉はつねに特例事例「一般」へと解消してしまう在り方、あるいは、「第一世界」のことばは無媒介の外被をとったものとしてあらわれ、「第三世界」のことばはサイドの意味においてオリエンタリスティックな露骨な媒介がはたらく在り方、そうした権力のゆるす回路から逸脱したサバルタンの登場に対する恐怖がはたらいてはいないか？これらの疑問は、ドゥソウサに属するのではなく、わたしの位置性、われわれの位置性を鋭く問うものとして、わたし（たち）の問題にほかならない。

そして、これらの問いに向き合うとき、《他の声》との応答可能性という課題が私たちをとるだろう。《証言》を開くこと、出来事への応答の作業とは、紛れもなく、《他の声》との応答可能性のある局面を構成する。

耳を傾けるべき、リゴベルタの声がある。

けれど、それでもなお、わたしはインディヘナとしてのわたしの在り方 *identidad* を隠しもち続けている。誰も知るべきでないと思っていることを、隠しもち続けている。どのような人類学者であろうと、どんな知識人であろうと、どんなに書物をもっているにしても、わたしたちの秘密すべてを明らかににはできはしない<sup>(35)</sup>。

隠し持たれている「わたしの在り方」。明らかにしえない「わたしたちの秘密」。われわれが《証言》に出逢い、それを開いていこうとするならば、その作業は、リゴベルタの「在り方」を暴き、彼女たちの「秘密」を明るみに出すことに、根底的に対立するだろう。

求められているのは、そうした（知的）搾取との間に境界画定などなしえない（知的）好奇心に身を委ねることではない。相互の水平性へと開かれるべき対話が一方の（それはわれわれの側のことだ）娯楽へと変質していくさまを座視することではない。民主主義的参加のふりをしながら、みせかけの法規遵守でしかない力を許すことでもない<sup>(36)</sup>。

状況から求められていること、われわれが求めていること——それは、隠し持ち明らかにすることを拒否する彼女（たち）の在り方に刻み込まれている暴力を見据えること、その同じ暴力のただなかを彼我を分断されながら異なる位置・異なる歴史のリ

ズムで生きているわれわれが応答し、連帯を模索し、暴力の批判の学を同時に実践としてつくりあげていくことではないだろうか。

## 註

- (1) 《自己価値形成 self-valorization》とは、イタリア・アウトノミア運動の渦中で提起された概念であり、何が《価値》であり何が《労働》であるかを、《プロレタリアート》自らが決定・生産し、自らに還元していく運動をさす。ちなみにここでの《プロレタリアート》とは、旧来の概念とは異なる、女性・失業者・青年・老人・「病者」・「狂人」といった、資本の支配下における展開された被抑圧者をさしている。この概念については、Negri, Antonio, translated by Harry Cleaver, Michael Ryan & Maurizio Viano, *Marx Beyond Marx: Lessons on the Grundrisse*, New York, Autonomedia, 1991.を参照せよ。
- (2) ソレンティナーメのキリスト教基礎共同体およびニカラグア素朴画については、『ニカラグア・ナイーフ』, 岩崎美術社, 一九九〇年を参照せよ。
- (3) Cortázar, Julio. "Apocalipsis de Solentiname", en *Los relatos, 4: Ahi y ahora*, Madrid, Alianza Editorial, 1985, p.14.
- (4) *ibid.*, p.17.
- (5) *ibid.*, pp.17-18.
- (6) *ibid.*, p.18.
- (7) *ibid.*
- (8) Dalton, Roque, *Pobrecito poeta que era yo...*, San José Costa Rica, C.A., EDUCA, 1984.
- (9) 以上のロケ・ダルトンのプロフィールについては、以下を参照のこと。飯島みどり「解説」、ロケ・ダルトン他著、飯島編訳『禁じられた歴史の証言—中米に映る世界の影』, 現代企画室, 一九九六年所収, 二三五~二四〇頁。
- (10) それだけではなく、この暗殺には、男性優位主義<sup>マナズモ</sup>も関係していただろうと思われる。太田昌国訳・解説「エルサルバドル革命における同志殺害問題：ファラブンド・マルティ人民解放勢力公式声明」, 『インパクション』第二八号所収（ただしこの訳はキューバ共産党機関紙『グランマ』英文版一九八三年一月二十五日号による）。
- (11) 『世界から』第一三号所収。
- (12) 『京都大学新聞』一九八四年一月一日号所収。
- (13) vease Gilly, Adolfo, *La senda de la guerrilla*, México D.F., Editorial Nueva Imágen, 1986, pp.225-262.
- (14) Dalton, Roque, *Miguel Mármol: Los sucesos de 1932 en El Salvador*, San Salvador, El Salvador, C.A., UCA Editores, 1993, p.9.
- (15) ジャック・ランシエール, 安川慶治訳「歴史修正主義と現代のニヒリズム」, 『現代思想』第二三巻第四号（一九九五年四月）, 三六頁。ただし「特異性」を「単独性」と

した。注意しておくべきは、ランシエールの提起が、ホロコーストの記憶をめぐる歴史修正主義というまさしく時代的な事象にかかわっていると同時に、「非常事態」につねにおかれつづけてきた一植民地期以来、見えない内戦が終わることなくたたかわれつづけてきた一「第三世界」における歴史支配の常態への批判としても敷衍・転用可能なことである。

- (16) 野村修訳「認識批判の序論」、野村編訳『ベンヤミンの仕事』、岩波文庫、一九九三年、一七七～八頁。
- (17) Dalton, Miguel Mármol, p.10.
- (18) *ibid.*
- (19) グアテマラ内戦下でグアテマラ民衆にとっての『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』と同様、サルバドル民衆が『ミゲル・マルモル』を持つことは（読む以前に！）、死、あるいは二度と帰ってこない「行方不明」の危険と同義だったことをわれわれは銘記すべきだろう。
- (20) Dalton, *op.cit.*, pp.10, 12. 彼が軽く触れている「政治的困難」とは、「ブラハの春」をめぐる立場性にかかわるものだと思われる。飯島、前掲書、二四〇頁も参照せよ。
- (21) ロケは、マルモルの政治的・思想的立場に同意できなかったことがたびたびあった、と明記している。*ibid.*, p.13.
- (22) Beverley, John, "The Margin at the Center: On testimonio (testimonial Narrative)," in George M. Gugelberger (ed.), *The Real Thing: Testimonial Discourse and Latin America*, Durham & London, Duke University Press, 1996, p.24. この問題提起にわたしは合意できない点をもつが、それでも、次のことを強調しておきたいと思う。すなわち、オーラル・ヒストリーなり何なりの「資料」をめぐる歴史方法論上の闘争は、《証言》をめぐる闘争とは位相を異にするものだ、ということである。
- (23) Yúdice, George, "Testimonio and Postmodernism," in *ibid.*, p.44.
- (24) Sklodowska, Elzbieta, "Spanish American Testimonial Novel: Some Afterthoughts," in *ibid.*, p.84.
- (25) *ibid.*, pp.86-87.
- (26) ショシャナ・フェルマン、上野・崎山・細見訳『声の回帰』、太田出版、一九九五年、一四三頁より重引。
- (27) 同上書、一二九頁より重引。強調は原文。
- (28) 同上書、一三三頁。強調はフェルマン、【 】内は訳者による。
- (29) なにがしかの固定的な「属性」をサバルタンの運動に与えることは、「サバルタン」のロマン化（＝実体化）を梃子とした知的搾取にそのままつながら、とわたしは考える。サバルタンの運動がつねに多様かつ重層的であるのではない。いかなる運動だろうと、それが「近代性」のさなかに登場するかぎり、「意志の領有」（レーニン）が必然的に要請する一致した「綱領」あるは「原則」の近代以降の組織的運動が圧倒的に優位をもつ。そのため、「至高なる政治」の下位項目へとサバルタンの運動が押し込められ得ることを忘れるわけにはいかない。そして、そうした組織運動が危機的状況に



において不可避免的に逢着する「あれかこれか」の二者択一へとサバルタンの運動が収斂させられる可能性もはっきりとおさえておく必要があろう。だが、その一方で、「単独性の不－可能な行為としての出来事」という観点において、サバルタンがつねに周辺化されてきたことによって不在とされた可能性に応答する作業は、変わらず残ることもまた、銘記しておかなければならない。

- (30) 『資本論』の初版における（歴史＝論理説の台頭を許した第二版の記述とはちがひ、マルクスの「オリジナル」な弁証法的論理がここでは展開されている）価値形態論を参照のこと。および、武田信照『価値形態と貨幣』、梓出版社、一九八三年、一九七頁以降を参照。
- (31) Carr, Robert, "Re-presentando el testimonio: Notas sobre el cruce divisorio Primer Mund/Tercer Mundo," in *Revista de crítica literaria latinoamericana*, Año XVIII. No. 36., pp.73-94. 1992.
- (32) D'Souza, Dinesh, "I, Rigoberta Menchú: A Modern Study in Cultural Hypocrisy ." in *The Federalist Review*, October 21, 1991. pp.2.7.
- (33) 興味深いのは、こうした「特殊化」の操作と非難が、「自由主義史観」を言う輩が、証言者となった元「従軍慰安婦」たちに対して攻撃する「論理」と非常に似通っている点であり、同時にその論調が「自国」内での人権派への攻撃としても用いられている点である。思うに、帝国主義的な「論理」には、その操作者たちが後生大事にしている国境などは、どうも関係がないらしい。
- (34) 細見和之・崎山政毅・田崎英明『歴史とはなにか－出来事の言葉と暴力の記憶』、河出書房新社、一九九八年、を参照。この論点に対して、ここでわれわれの現状を参照項として文脈化しておきたい。それは、歴史と裁判とをめぐる問いとしてである。カルロ・ギンズブルグが『歴史家と裁判官』（上村忠男訳、平凡社、一九九二年）で述べていたように、「犯罪」の捜査・裁判の過程で編成・提出された調書は、法的な意味で特殊性を付与されたオーセンティックな「証人」の口ごもり、訂正など、発話の具体的な身体性をすべて奪いながら、現実にはありえない閉鎖的な「整合性」を備えるにいたる。それが冤罪の場合であれば、なおさらのことだ。調書・法廷証言を歴史の資料として読み直し、調書の編成に及ぼされた権力の効果が消し去ろうとした「不在の問題」を追ってみたとき、いかにして「犯罪」がそのようなものとして構成されていくか、いかにそれが「真実」に変えられていくかが浮き彫りにされるだろう。たとえば、甲山事件において冤罪がつくられていく過程をわれわれは思ってみる必要がある。
- (35) Burgos, Elizabeth, *Me llamo Rigoberta Menchú y así me nació la conciencia*, México D.F., Siglo veintiuno, 1985, p.271. ここで「著者」をエリザベス・ブルゴス＝ドブレとしたのは、ロケ・ダルトンの場合と同様の問題からである。メタ人類学的な証言編成の問題についてさらに追究した議論は別の機会をまちたい。
- (36) ギリェルモ・ゴメス＝ペーニャ、今福竜太訳「ボーダーの呪術師」、今福他編訳『世界文学のフロンティア1』、岩波書店、一九九六年、を参照。